

みんなの思いが積み重なった 2021北信越インターハイ

久々子湖に響いた歓喜の叫び



入賞した美方高校ボート部の精鋭たち

七月二十四日～八月二十四日、「輝け君の汗と涙」というテーマの下、全国総合体育大会が北信越五県と和歌山県で行われた。コロナウイルスの影響で二年ぶりの開催となった。美方高校からはボート部・駅伝部が出場し、今まで練習してきた成果を最大に発揮した。

男女クオドルプル 春夏二冠

八月一六～十九日、県立久々子湖漕艇場にてボートの熱い戦いが繰り広げられた。女子舵手付クオドルプル(浅野・鶴田・上村・柴田・馬野)、男子舵手付クオドルプル(脇田・柴崎・津志田・山口・岩崎)が優勝を果たし、選抜大会に続く二冠を達成した。また女子シングルスカル(清水)が三位入賞を成し遂げた。女子舵手付クオドルプルは決勝直前に雨

脚が強まった。序盤は競り合ったが五〇〇mで他艇を突き放し、そのまま一位でゴール。レース後、本部前まで艇が帰ってくる、メンバーから「清水先生大好き」と感謝の思いが飛び出した。主将の馬野さんは「全国優勝できて安心した。毎日久々子湖で漕いできた経験を生かして決勝で良いレースができた」と最高の笑顔だった。

男子舵手付クオドルプル決勝は雨、風の波の悪条件をものともせず圧倒的な強さで優勝し、目標の三冠に一歩近づいた。ゴール直後、コックス脇田さんが艇から立ち上がり喜びを爆発させた。主将の山口さんは「最高すぎて頭が真っ白。思いっきりレースが出来たのも本当に皆さんのお陰。先生・地域の方・補助員の皆さんありがとう」と満面の笑みを見せた。



男女クオドルプル最高の瞬間



三位入賞 清水さん

女子シングルスカルの清水さんは「三位という結果が悔しい。応援してくれた人も多かった。国体では種目を変えての出場になると思うが優勝出来るよう頑張る」と前を向いた。女子ダブルスカル(岩本・武田)と男子シングルスカル(岸本)は入賞を逃すも精一杯のレースをした。顧問の清水先生は「選手たちには『久々子湖の水を極めよ』と言ってきたが、今日の難しいコンディションでも最高のパフォーマンスを見せてくれた。顧問の清水先生は「選手たちには『久々子湖の水を極めよ』と言ってきたが、今日の難しいコンディションでも最高のパフォーマンスを見せてくれた。」

駅伝部 とんな障害も 乗り越える

七月三十一日、98スタジアムで行われた三千m障害の予選二組に藤原新太さんが出場した。結果は9分29秒03で二組一〇位。藤



水濠を越える藤原さん

原さんが全国大会に出場したのは初めてのことで。三千メートル障害はハードルや水濠を越えて行く過酷で難しい競技だ。藤原さんは多くの選手と競り合いながら美しいフォームで最後まで駆け抜けた。レース後「大きな舞台だが緊張しすぎず楽しんで走ろうと挑んだが、トップ集団で走れなかった」と悔しい思いを語った。次の目標は「県駅伝で優勝して全国大会に出場したい」と意気込んだ。

ポルトU19 日本代表四人内定

U19日本代表候補選考レースを経て、全国で六人の選手が内定した。内四名が美方高校の選手だ。選手たちの意気込みを紹介する。

山口遼平

今までの感謝を胸に夢を叶え世界と戦う。憧れの人と漕げるように努力を重ねていく。

津志田匠太郎

目標はオリンピック日本代表。

橋田彩桜

成長した自分を世界の舞台で発揮したい。

泉原

今年の四月、アメリカ軍がF30の目撃情報に関する報告書を公表した。もし異星人が地球上に立ち、私たちの目の前に現れたら：▼特撮テレビ番組ウルトラシリーズの一つに「帰ってきたウルトラマン」の怪獣使いと少年がある。善良な宇宙人メイツ星人を父のように慕う少年(良)が町の人々から宇宙人だと疑われ迫害を受けていた。メイツ星人が自ら宇宙人であることが暴露すると人間に射殺されてしまう。すると、メイツ星人により幽閉されていた怪獣ムルチが暴れだし人間を

襲った。人間はウルトラマン(郷)に助けを求めたが、郷は「勝手に言うな、怪獣をおびき出したのはあなたたちだ」と言い放ち戦いを拒んだ。この作品は後に人権と差別を深く描いたとして評価された▼東京オリンピック・パラリンピックの基本コンセプトである「多様性と調和」は、「あらゆる面での違いを肯定し、自然に受け入れること」を目的としている。サッカー会場では、選手が片膝をつく差別に対する抗議の姿勢が見られた▼アメリカ軍が報告したF30が空想だったとしても、私たちは「多様性と調和」の課題を意識していくべきだ。

選手に負けない熱い心 高校生ボランティアの支え

熱く眩しいインターハイ。選手たちが戦う裏側でそれを支えるたぐさんの高校生がいた。選手とサポーター、立



アナウンスをする補助員

場は遠くとも熱い思いはどちらも変わらない。福井県の高校生二二一人が二〇一九年七月から活動推進委員・活動委員として、広報やおもてなし、選手団激励など様々な形でインターハイを支えてきた。美方高校からは八名が参加した。三三四西村さくらさんは『おもてなしマップ』を作

成した。「久々子湖周辺のレストランやホテルなどを紹介し、マップで分かりやすく工夫した」と語った。三三一渡辺魁斗さんたちは手書きのイラストやシールで飾り付けた三枚のウェルカムボードを制作した。「インターハイをきっかけに福井県の知名度が上がりもっと盛り上がってほしい」と熱を込めた。

ポルト競技開会式では三三四鳥居楓月さんが「二年分の思いを込めた特別な大会です。素敵なものにしましよ」と地元生徒を代表



選手受付の補助員

して歓迎した。また、美方高校生一三七名は、ポルト・ソフボール会場でボランティアとして大会を支えた。二二濱川悠琳映さんは「受付補助として選手に挨拶をしたり、

この他にも、表彰式や艇の誘導、記録係、駅での案内などそれぞれ役割の持ち場で活躍していた。みんなの思いを結集したインターハイが幕を閉じた。